

北九州市50年

未来へ

# 古ビル再生 商店街に光

じつた返した」。  
しかし、鉄冷えや産業構

造の変化で衰退。にぎわい  
は過去のものとなった。

その銀天街の一角にい  
ま、全国の建築関係者や自  
治体から注目を集めテナ  
ントビルがある。

■ ■ ■  
「中屋ビル」。築約40年  
で外観は古びているが、2  
階に洗練された空間が広が  
る。雑貨やアクセサリーな  
どを売る小型店やアトリエ  
が20ほど並ぶ。イタリア語  
で東京で建築事務所を開く  
仕掛けたのは、地元出身  
の嶋田洋平さん(38)。銀天街  
にチエーン店が増え、独自  
性を失いつつあると感じて  
いた。「商店街にしかない  
ものを売る必要がある」

ボボラートは店主も客  
も、20~40代の女性が中  
心。オーナーの嶋田洋平さん  
(53)は「商店街に若い世代  
が戻り、雇用も生まれた」

で人々が集まるという意味  
の「ボボラート」と名づけ  
られた拠点だ。

「商店街にこんな所、あ  
つたんだ」。初めて来た女  
性客が目を輝かせた。

中屋ビルが採り入れたの  
は、リノベーションという  
方法だ。建物の古さを生か  
し、時代にあった用途に改  
修する。建て替えより圧倒  
的にコストが安い。

嶋田洋平さんは、2坪以下の  
店が入っていたが、約10年  
前に閉店。後継が決まらず、  
大半のフロアが空いていたの  
を11年から昨春にかけて改修した。

ポボラートの賃料は1坪  
(8・3平方㍍)で8千円。  
大半は2坪以下のもので、資  
金が少なくても出店しやすい。  
自分で制作するのに比べ、作り手同士の刺  
激があるのも好評だ。

市も後押しする。2008年  
のリーマン・ショック以降、企  
業の支店が福岡市へ流れ、空きビル・家対策  
は大きな課題だからだ。

中屋ビルのリノベーショ  
ンをきっかけに、小倉の空  
きビルや民家をどう生かし

たらいいか議論する勉強会  
も、動き出している。

「リノベーションスク  
ール」と呼ばれ、梯さんや嶋  
田さんらが中心となって開  
催。年2回、事前に選んだ  
空き物件について4日間か  
けて話し合い、オーナーに  
直接提案する。

ビジネスチャンスや将来  
の街づくりにつなげよう  
と、建築家や建築を学ぶ学  
生、不動産会社、経営コン  
サルタントら、インター  
ネットや「ミミ」で毎回約50人  
が集まる。半数が首都圈や  
福岡市など市外からだ。横  
浜市や静岡県熱海市の職員  
らも参加。すでに提案をも  
とに数カ所の物件が改修に  
こぎ着けた。

スクールの講師を務め、  
地域再生を手がける「アフ  
タヌーンソサエティ」(東  
京)の社長、清水義次さん  
(64)は言う。「中心市街地  
の衰退や老朽化は全国の街  
が抱える問題。よそ者の目  
線と、街を良くしたいとい  
う地元の人の熱意が合わさ  
った小倉の取り組みは先進  
的で、今後も注目されるだ

高さ経成長期、小倉の  
街は隆盛を極めた。65(昭  
和40)年、北九州市の人口  
は104万人。福岡市より  
30万人も多かった。洋品店  
を營む浜田浩三さん(74)  
は「歩くと肩があつかるほど

低い壁で区切ったブースが並  
び、作家たちが作品の制作販売  
をしている。1日、北九州市小  
倉北区の魚町銀天街、満脇正撮影

8年のリーマン・ショック  
以降、企業の支店が福岡市  
へ流れ、空きビル・家対策  
は大きな課題だからだ。

中屋ビルのリノベーショ  
ンをきっかけに、小倉の空  
きビルや民家をどう生かし  
たいのか議論する勉強会  
も、動き出している。

スクールの講師を務め、  
地域再生を手がける「アフ  
タヌーンソサエティ」(東  
京)は「商店街に若い世代  
が戻り、雇用も生まれた」

（平林大輔）